

追悼 宮仕勉先生

山川一義

有機化学第一研究室 修士（1983年）

向井利夫先生が2020年1月10日に逝去され（95歳）、有機化学の大御所の先生方の訃報が続き、一つの時代の終焉と受け止めておりました。その矢先、宮仕勉先生が、2020年4月11日にお亡くなりになりました（80歳）。お二人が続けて他界され、門下生一同、悲しみに包まれております。お二人のご冥福をお祈り申し上げます。

私は、向井利夫教授の研究室を1981年に卒業、1983年に修士課程を修了し、富士写真フイルム（株）に入社、2019年1月に定年退職、1年間の嘱託を経て、2020年2月より、東京大学大学院理学系研究科化学専攻 小林修教授の下で、大学職員として固体触媒を用いるフロー合成の社会実装を目指した活動を推進しております。

向井利夫教授の研究室に1980年に配属された時に、直接ご指導いただいたのが、宮仕勉先生（当時助手）で、助教授に昇格され、修士修了までの3年間まさしく手取り足取り、研究の進め方から私的なことまでご指導いただきました。就職後、結婚式にも主賓として出席いただき、感謝申し上げます。

40年前の東北大学在籍時の出来事を思い出しながら、故人を偲ばせていただければと思います。当時は、東北新幹線の開通前で、東京－仙台は、特急ひばりで片道4時間かかる時代で、富士フイルムの入社試験の際には、会社が手配したホテルに宿泊して、1泊2日で受験した思い出があります。古き良き時代だったと思います。

向井利夫研究室は、必ずしも学生に人気がある研究室ではなく、希望した学生は、真面目で、武骨な学生だったように思います。同期は4名で、遠藤さん（元帝人）、堀田さん（元花王）、三枝さん（元学校教員）など成績優秀な学生と比較して見劣りする生意気な学生だった私は、宮仕勉先生のグループに配属されました。企業など他の組織にも共通かと思いますが、一番できの悪い学生を厳しく鍛え上げる方針だったかと思います。向井先生の後継者として、その後に有機化学第一を主宰した宮仕先生のグループには、当時優秀な先輩、後輩がたくさんおられました。佐藤克洋さん（元富士ゼロックス）、藤井さん（元アステラス）、玉田さん（元ダイセル）、アカデミアの高橋さん、鎌田さん、後輩では小野さん（凸版）、横川さん（住友化学）、川口さん（日立化成）など。研究室にベッドを持ち込んで住み込んでいる方もおられ、世界と競争する研究の第一線に触れることができました。研究室で重なってはいませんが、中條さん（元昭和電工）、羽里さん（元帝人）、故西澤さん（花王）など、企業で活躍された多くの方を輩出され、社会に出てからお付き合いさせていただいています。

修士課程修了後に会社に入社する際に、宮仕勉先生からは、博士課程に残らずに研究室のノウハウを全部吸収して出ていく修士に対しては、かなりきつめの言葉をいただいた気が

します。博士課程の学生が、独り立ちして研究を推進してくれることが、研究室の運営に非常に重要か。その当時の私には、全く思いが及ばなかったこと、反省しています。

さて、研究に関して、宮仕先生から教わったこと、一言で言うと「Deep-Seated な研究（椅子に深く座り、腰を据えた研究）をやれ」ということでした。流行を追わずに、本質を理解するまで徹底的に研究する。反応の副生成物を丹念に単離、構造決定して、速度論的に反応を解析して、反応機構をきっちり理解する。また、元素分析が合致するまで精製を繰り返し、純品を単離する。分析手段で構造が決定できないときは、別途合成する。基本を徹底的に叩き込んでいただきました。与えられたテーマの研究にたどり着くまでの原料合成なども学生の教育には欠かせないものと思います。真島先生、野副先生など日本の化学のリーダーから綿々と繋がる東北大学理学部化学科の伝統かと思いますが、企業の研究開発でも NMR、HPLC で収率を出すだけでなく、目的物を単離することが重要なことは言うまでもなく、徹底的に叩き込んでいただいたこと、深く感謝しています。

また、紙面の関係で詳細は省きますが、修士の時の研究テーマは元富士フィルムの杉山さんが発見し、元花王の故西澤さんが発展され、元アステラスの藤井さんから引き継いだテーマでした。立体的に規制された 1,3-双極子の環状付加反応が、平衡反応であるということを見出し、赤尾さん（三菱ケミカル）に引き継がれて競合するグループの仮説を否定して、正しく反応が理解され、JACS に投稿されました。後日談で、競合するグループの仮説が正しければ、私が 2 年間研究した成果はほぼ全否定され、修士課程を修了できずに、研究を継続しなければならなかったらしいです（研究室での研究が継続できたのかもしれませんが）。競合するグループの仮説が否定され、宮仕勉グループが勝利したわけですが、研究責任者として肝を冷やしたと宮仕教授が退官記念講演で講演されていました。

他のグループとの競争という経験は、その後の企業での研究開発に役に立ったことは言うまでもありません。負けるわけにはいかない企業間の競争でした。1980 年代のコダック、アグファ、コニカとの写真分野でのバトルは、当時の上司の古舘信生さん（中西研出身）、伊藤勇さん（伊東研出身）、佐藤忠久さん（伊東研出身）も大変苦勞されたと思います。今となっては、良き思い出になっているかと思いますが、先輩方の東北大学研究室時代の海外研究者との切磋琢磨、競争、競合の経験が役に立っていたのでは？と拝察します。

東北大学化学教室の重要な行事である野副杯では、私が投手をやり、優勝しています。捕手は、堀田さん（元花王）。宮仕先生は、独特のサイドスローで、キャッチボールの相手をしていただき、しょんべんカーブを受けていただいたりもししていました。優勝した折に、研究室の OB の方に「お約束の品お待ち申し上げます」というまことに不躰な手紙を差し上げ、ウィスキーをお送りいただき、研究室で祝杯をあげました。向井先生、宮仕先生もあきれておられましたが、先輩方には、温かくご対応いただきました。感謝申し上げます。

また、会社に就職した後、宮仕教授の研究室からは、優秀な後輩を富士フィルムに送り込んでいただき、森嶋さん、青島さんは、いずれも有機部門の管理職として活躍しています。お二人が中心になって、宮仕研究室の後輩を集めて、2016 年に宮仕先生を湯河原温泉に招

待したことも懐かしく思い出されます。富士フィルムの先輩、宍戸さん、杉山さんも同席され、旧交を温めました。森嶋さん、青島さん、深く感謝申し上げます。

長々と書いてしまいましたが、最後に宮仕先生のプライベートな話、趣味について触れたいと思います。根っからの釣り好きで、海釣り、溪流釣りを退官後も楽しんでいたようです。退官後に連絡を取ろうとすると、北海道に奥様と長期滞在して釣り三昧だったこともありました。

私が学生の頃は、元アステラスの藤井さん、アカデミアに行かれた高橋さんと一緒に海釣りに同行させていただきました。気仙沼だったのでしょうか、漁師の方のアルバイトで、早朝の仕事を終えてから、我々の相手をしてくれるわけですが、5時くらいに行くと「こんなに日が高くなってから？優雅だね」のノリで、揶揄われながら、ライフジャケットも着けずに外海まで小型漁船を貸し切って出て、波が高く水平線が見えない中での釣り。「撒き餌」をしてそのまま陸に上がるまで寝ている先輩がいる中、ビギナーの私は、ねう（アイナメ）、カレイなどのアタリなど気が付かずにしっかり餌を飲み込んでいたものの、一番釣り上げた記憶があります。宮仕先生のお宅にお邪魔して、釣った魚を先生がさばいて、煮て食べた思い出があります。一夜干しくらいの方が美味しいのかもしれませんが、自分が釣った魚が美味かった思い出があります。奥様には大変ご迷惑をおかけしました。

会社に勤務してからも1回／2年程度、宮仕先生と一番町、稲荷小路、名掛丁あたりで、昼から二人で飲んでいました。喉の手術をされた後も回復されてからは、ビールはダメだけど白ワインは大丈夫、とかゆっくり美味しそうに飲まれていました。仙台名物として、牛タンではなく、アナゴのうまい店をご存じで、ホヤなどもつまみにゆっくり食事したことが懐かしく思い出されます。2019年夏にも仙台駅のホテル内で、魚の美味しい店で軽くお付き合いいただきました。その時は、ノンアルコールでしたね。体調を崩して入院されると知り、慌てて果物を送りましたが、マンゴーを美味しく食べてから入院され、間もなく亡くなったと後日奥様からお手紙をいただいた時には、涙が止まりませんでした。

宮仕先生、公私ともに本当にお世話になりました。飾らない優しいお人柄忘れません。ご冥福をお祈り申し上げます。

合掌。